

「盲人のいやし」

2014年09月17日

マルコによる福音書8章22節～26節。一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

福音書は幾人かの盲人が主イエスによっていやされた奇跡を記している。彼らは生活の術がないので、道端に座って物乞いをしていた。バングラデシュに行った時、大きなイスラム教寺院の階段の下で、白い髭を蓄えた年老いた盲人が筵に座って、大声で「アッラー、アッラー」と叫んで物乞いをしていた。聖書時代は、こうであったのだろうと、しばし老人に見入ったことを思い出す。障がい者は、神からの裁きを受けた「罪人」と烙印され、共同体から排除されていた。それは、律法の下での言い分である。聖書には障がい者が多くいたことが記され、上記の盲人も主イエスにいやしを求めて連れて来られた。彼は家族、仲間に愛されていたと思える。パウロは「文字は人を殺しますが、霊は生かします」と書いている。律法は人を殺すが、愛は人を生かす。障がい者たちは仲間の愛を受け、それなりの生活の場が確保されていたのではないか。

水上勉の『一休』という小説だったと記憶するが、こんなことが書かれていた。明治になって欧米人が日本に来た時、町で障がい者を見かけないので、聞いたところ、生まれた時に障がいがあれば「間引き」したと答えたという。日本では彼らの命の保証はなかった訳である。私の子どもの頃、障がいを持った子どもは家に閉じ込められた状態で、学校にも行っていなかった。最近では、だいぶ開かれてきたと言えよう。

けれども最近、盲人の女子高校生が蹴られて、怪我をしたという事件があった。また盲導犬が傷つけられた。訓練を受けていたので、吠えることもなかったという。何とも悲しいニュースであった。ホームレスの人々を襲う事件は前々からあった。社会的弱者を痛めつけるところには、加害者の精神的な歪みがある。その歪みは不要な者は失せろという意識であろう。今の時代、自分自身も不要とされることが多々、起こるのではないか。不要と見なされた者がどんな扱いを受けているかに、文化のバロメーターがある。

上記の盲人のいやしは、いやしの中で最も詳細に記されている。主イエスは連れて来られた盲人を、まず村の外に連れ出している。そして、彼の目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて「何か見えるか」と尋ねている。彼が「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります」と薄ぼんやり見えてきたと答えている。すると更に、もう一度両手を目に当てている。すると、はっきり見えるようになった。この間、彼は主イエスの優しさを身にひしひしと感じ、徐々に見えていく状況を喜びつつ受け止めただろう。彼は共同体に復帰していった。今日、病人は医者からの適正な治療を受けられる。私たちにできることは障がい者を仲間として受け入れていくことである。自分自身がいずれ障がい者になり、正しくは、既に障がい者であるからである。